

福島大学附属幼稚園「最優秀園実践発表会」 開催レポート

2020年11月7日（土）、2019年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「最優秀園」を受賞した福島大学附属幼稚園による、「最優秀園実践発表会」を開催しました。新型コロナウイルス感染防止のためZoomウェビナーによるオンラインで実施いたしました。南は沖縄県から北は北海道までの認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・中学校・大学等の教育・保育関係者から異業種の方も含めて約220名（端末数）の参加がありました。

以下に福島大学附属幼稚園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時：令和2年11月7日（土） 9：30～11：30
2. 主題：自分で考え、試そうとする子どもを育てる
～生き生きとした体験や安心して伝え合える環境を通して～
3. プログラム
 - 1) 開会式・論文発表 9：30～10：05
 - 2) 協議会（質疑応答） 10：05～10：20
 - 3) 記念講演 10：20～11：20
演題「幼児の気づく力、考える力、学びに向かう力を育む」
講師 國學院大學教授 神長美津子氏
 - 4) 閉会式 11：20～11：30

研究発表

研究主題「自分で考え、試そうとする子どもを育てる～生き生きとした体験や安心して伝え合える環境を通して～」

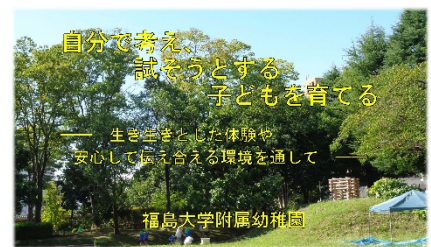
前年度の研究から私たちは「科学する心」を「幼児が内部にため込んだ情報を元に考えを巡らせ、試したり、人の意見を聞き入れたり調べたりしながら納得した結論にたどりつくこと」ととらえた。そして恵まれた環境を生かした自然事象とのかかわりにスポットをあて、日常のさまざまな保育実践から各年齢で「科学する心」がどのように成長していくかを、明らかにしてきた。その結果、3歳から5歳にかけて、幼児の思考の特徴は資料 P.4 の図のように変化することがわかった。

3歳児の刹那的な思いつきともいえる発想は継続的な思考に、一面的・部分的な物の見方は多面的・総合的に、自己中心的な捉え方は客観的に、空想的から現実的と変化していく。このような特徴を捉えながら、実践例を通して科学する心の成長過程について発表した。

これらの実践から「科学する心」の土台は豊かな体験であることが改めて実証された。そして「科学する心」を育む要素は、小さな疑問を持ち続けること、疑問に寄り添ってくれる友達や保育者、探究心とそれを支える環境といえることも明らかになった。

本研究を通して、私たち教師がいかに幼児たちに有益な体験をさせるか、それまでに得たたくさんの経験や情報を結びつけ、解決に導く援助を行えるか、つまり「思考」の線をつないでいけるかが子どもたちの「科学する心」を育む鍵となることが改めて浮き彫りになった。

また、その後の子どもたちの学びについても実践事例の発表を行った。継続的な実践により、保育者が幼児の問いに気づき、行動の意味を読み取り、十分に試せる環境を保障してやるのが「科学する心」の成



長や「学びの質の向上」につながる実証されつつある。私たちはこれからも「科学する心」の視点を持ち、日常の遊びで抱く子どもたちの疑問に寄り添い、小さな発見や気づきに共感し、子どもたちが「自分なりに理由つけて考えていく」道筋作りや、自分の学びを振り返れる援助をさらに追究していきたいと考えている。

協議会（質疑応答）

事前に、参加者に受賞論文及び発表資料を読んでいただき、予めQ&Aで質問を受け付けるとともに、当日もチャットで質問を受け付けた。



Q1：好奇心を育てるために大切にしている環境設定は？
なぜそのような環境設定が必要か？

A：好奇心をもってかかわっていくためには、幼児が自ら進んでかかわりたくなるような環境が必要である。中でも自然環境は身近にあつて様々に変化し、幼児の興味関心を引きつける魅力あるものだが、そういった自然環境を豊かにすることが大切である。そしてかかわりたいときに自由にかかわれるような時間・空間の確保も必要である。日常的なかかわりがあるからこそ、身近な「不思議」を感じ、自ら興味をもって継続的にかかわっていくことが可能だと考えるからである。

Q2：保育者の関わりは、科学する心を育てるために重要な環境の一つであるが園全体として共通理解していることは？

A：保育者が先走って教えないこと、また、幼児が予想した通りに展開しなかった際にさまざまに思い（考え）をめぐらせ試行錯誤する姿を見守ることを共有している。

Q3：「科学する心」を育てていくと小学校以降どのように生きて働く意識して保育をしているのか？

A：たとえ結論にたどりつかなくても、自分で考え、推測することが面白くなってくる。その面白さを知るとすぐに答えを得ようとするのではなく、自分なりに考えをもち、あれこれと理論づけていく過程や周囲の友達と自分の考えを伝え合い、検証していくことが身につく、小学校以降の学習意欲につながると考えている。

Q3：発表資料P4の内容について、図の中の3歳児「こうだ（自分事として展開）」から4歳児「こうすればこうなるだろう（条件付断定）」に変化が起きる大きな要因や経験の積み重ね、具体的な事例等を教えてほしい

A：3歳児「こうだ（自分事として展開）」から4歳児に向けてどういうふうに変わっていくかという点で、保育者が身近な経験と実際の出来事を丁寧に結び付けていくことにより、3歳児でも科学する心の土台を築いていくことができるのではないかと考えている。具体的には、事例2「ザリガニのはさみは食べられちゃったんだ」で、自分の腕が骨折してギブスをはめていた子どもが「骨が折れたのかもしれない」と言った時に先生が「折れちゃったのかもしれないね」と受け入れ認める働きかけをしている。このような丁寧なかかわり方が、やがて自分が面白いと思ったことや自分で考えたことを先生に認めてもらううれしさ・楽しさ等につながっていくと考える。

以下は、発表中チャットで寄せられた質問とそれに対する回答
(当日未回答分のみ)

Q 4 : 豆の「バナナ」の事例で、保育者でなく理科の先生が教えてくれるというのは、子どもにとっての意味がどのように異なると考えておられるか？



A : とすれば保育者が何でも知っている存在になりがちである。しかし理科の先生などの専門家に依頼することで、子どもにとって保育者も疑問や学びを共有する人間味のある存在となると考えている。

Q 5 : ありがとうございますお芋を水に浮かばせるに至る過程をお知らせ願いたい。

A : 論文 P. 16 の事例 4 に詳細が載っているのでご参照いただきたい。

Q 6 : (ありがとうございますお芋の事例で) あらかじめ保育者が想定し、また、願いを持って容器などを用意しておいたのか？

A : 別の遊びで水の量を見るために透明な物を選んで使っていたのがこの容器である。使用後、片付けておいた場所が、ジャガイモを洗った水道の側で、偶然目につくところにあったようだ。このとき、ジャガイモを水に浮かべることが想定外であり、その容器を選んで持ってきたことにも驚かされた。

Q 7 : 「科学する心」の土台は豊かな体験である」という時の「豊かさ」をもう少し具体化するとしたら、どのようになるか？

A : 別な言葉に置き換えるとすると、「多様な(幅広い)」ということである。保育者が予めさせたいと願う体験のみでなく、子どもの側から偶発的に生まれた体験等も含め様々な体験ということである。

Q 8 : 「科学する心」を「納得した結論にたどり着くこと」ととらえられたとのことだが、納得した結論にたどり着く、という目的に向かってまわりの環境や友達、保育者、経験から試行錯誤していく過程が「科学する心」と考えていた。結論にたどり着けなくても、あきらめることがあっても、その過程があれば科学する心ははぐくまれているように思える。「結論にたどり着く」ことを「科学する心」とされた経緯を教えてください。

A : 詳細については、論文 P.1 をご参照いただきたい。前年度の論文からそのように導いたが、「そのような姿をみせるのは5歳児ではないか」という疑問から、資料 P.4 のような各年齢毎の発達過程を導いた。ご指摘の通り、目的に向かってまわりの環境や友達、保育者、経験から試行錯誤していく過程が「科学する心」であり、たとえ結論にたどり着けなくても、あきらめることがあっても、その過程こそが「科学する心」の土台となると考えている。

Q 9 : 貴園で様々な保育活動の過程において3~5歳児に育まれた「推測」、「条件つき断定」、「自分事として展開する思い」が、小学校以降の生活科や理科等の「教科の学び」とどの様に繋がっていくのか、という「見取り図」のようなものをお持ちか。またそのことについて、附属小学校の先生方とご協議などされておられるのか。

A : 今年度から、幼小の接続について研究に取り組んでいるところである。教科の学びとのつながりについても協議していきたいと考えている。

記念講演

神長美津子氏/國學院大學教授

本園の事例や「科学する心の成長過程」を、今回の改訂のキーワードである「資質・能力の3つの柱」(主に思考力に視点を当てて)「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」等とカリキュラムマネジメントを関連させながらお話いただいた。内容は以下の通り。

「資質・能力」を念頭において教育課程や全体的な計画を見直しながら進めようとしていることの大きなヒントが「科学する心の成長過程」をとらえた取り組みの中にあるのではないかと。中教審の考え方を実践と結び付けていきたいと思いテーマを「幼児の気づく力、考える力、学びに向かう力を育む」と設定した。福島大学附属幼稚園の論文を読み、「科学する心の成長過程」について以下のようなことを感じた。

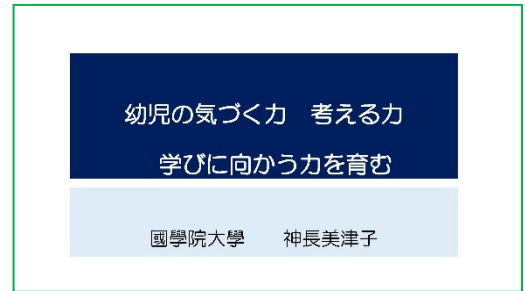
- 一つ一つの実践から読み取れる「子どもの思考する姿」
- 「科学する心」に対する継続した研究の取組
- 3歳児、4歳児、そして5歳児の姿となっていく「成長過程」
- わくわくドキドキする園環境

中教審では、学校教育において「生きる力を育む」ことを大きなねらいとしている。「18歳までに子どもたちに学校教育の中で育成すべき資質・能力」を3つの柱で示している。そして自分の生活をよりよくしようとするのが学びに向かう力の原点である。乳幼児期の子どもたちはまさに自分の生活をよりよくしよう、自分の遊びをもっと楽しもうと学びに向かう力を求めて活動している。この気持ちをしっかりと小学校以降の学校教育につなげながら確かなものにし、自分の人生に置き換えていくことが大切である。そしてそのためには知識や技能、思考力や判断力・表現力が必要である。

幼児教育は3つの柱を「知識や技能の基礎」と「思考力・判断力・表現力等の基礎」と「学びに向かう力、人間性等」としている。特に小・中・高のいう3つの柱と比較すると、幼児教育では将来生きて働く知識や技能の基礎となる体験という意味で「知識・技能の基礎」、将来の思考力・判断力・表現力につながる基礎となる体験という意味で「思考力・判断力・表現力等の基礎」という言葉になっており、基礎となる体験ということを強調している。学びに向かう力・人間性は、主体的な態度を育成するという心情・意欲・情意的な部分であり、これまでも幼児教育で大切にしてきたところである。従って、むしろ「知識・技能の基礎となる体験」とか「思考力・判断力・表現力等の基礎となる体験」に対する関心が高いと思われる。

「遊びの中で学ぶ」ということは、生活や遊びの中で様々な体験を通して「気づく力」「考える力」「学びに向かう力」を育てていくことである。「気づく力」により、いろいろな物事に関わって法則性・関連性や規則性に気付き、それらとの関わりを深め、予想したり推測したり、比較・分類・確認するなど「考える力」で試行錯誤を繰り返しながら達成感・充実感を味わい、思考力を深めていく。また、それらの力を元に、他者と伝え合ったり話し合ったりしながら、「学びに向かう力」(感情のコントロール・課題を解決していく力・粘り強さ・思いやりの気持ちなど)を育てていくのである。

こういったことは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」の⑥思考力の芽生えにも表記されている。この10の姿は子どもの育っていく姿を見ていく視点ではあるが、それは子どもに何かさせるのではなく、なぜ育ってきているのか、その背景には何があるかなど、カリキュラムの見直しのためのものである。「思考力の芽生え」で、5歳の最後にそのような姿になるための様々な体験は3歳・4歳の園生活にもちりばめられている。むしろ私たちはその「芽生え」が3歳・4歳のどこにあるのかを把握し、5歳につなぐ道筋をカリキュラムで押さえていくことが必要である。そのためのわくわくドキドキする環境づくりを保育者間で共有し、教育課程の見直しを図っていくことがカリキュラムマネジメントである。



まとめ

「科学する心」を育てるための3つの視点について

- 子どもたちの疑問や課題を引き出す環境・状況づくり
子どもたちが偶然出会えるような環境を精選して構成することが大事である。また、子どもたちが試行錯誤できる、遊びを十分楽しめる時間を保障してやることも必要である。
- とともに伝え合い、育ち合う仲間
の存在
考えを深める時に周囲に友達がいることの意味が大きい。友達と言葉を交わすことによって思考が深まっていく。頭の中がごちゃごちゃしていても、言葉で相手に伝えようとすることで整理される。また、相手の反応を見ながら自分の考えを整理し、それを言葉で表現していく。
- 思考する子どもたちの姿を支える保育者の存在
子どもたちのこだわりに基づき、それをどのように育てたいかという願いを保育者が持ち、子どもたちの試行錯誤を温かく見守ることが「科学する心」のベースとなる。

質疑応答（講演中のチャットによるQ & A）

Q：子どもたちが面白がり気付き、探求し知り得たことを元にごっこ遊びに発展していくことは科学を育む心から離れていってしまうのか。

A：ごっこ遊びはイメージの共有を楽しむわけで、イメージの共有が言葉を育み、またアイディアを出し合い思考を深める。それは科学する心を育てていくので、切り離さずに子どもの育ちを見ていくことが大切である。